※新潮社「考える人」2013年夏号より転載　©Haruki Murakami 2013.All rights reserved.無断転載を禁止します

［河合隼雄物語賞・学芸賞創設記念］
特別寄稿

魂のいちばん深いところ

河合隼雄先生の思い出

村上春樹
text by Murakami Haruki

photograph by Sugano Kenji

「物語というのはつまり人の魂の奥底にあるものです。人の魂の奥底にあるべきものです」――約500人の聴衆を前に、村上春樹氏は時折ユーモアを交えながら、河合隼雄氏への深い共感とその交流を語り、自身の小説についても語った。最初の出会い、心理療法家と小説家の仕事の共通点、そして魂と物語の関係……。河合隼雄賞の創設を記念する『公開インタビュー』に先立って行われた村上氏のスピーチを寄稿のかたちで再現する。

※新潮社「考える人」2013年夏号より転載　©Haruki Murakami 2013.All rights reserved.無断転載を禁止します

僕は誰かのことを「＊＊先生」という風に、先生づけで呼ぶことってまずないんですが、河合隼雄さんだけは、いつもつい「河合先生」と呼んでしまいます。「河合さん」とはあまり言いません。なぜだろうとよく不思議に思うんですが、結局のところ河合先生は「河合隼雄」という生身の人間と、「河合先生」という社会的役柄を持つ人格とを、とてもうまく使い分けておられた。そういう印象があります。

河合先生とは何度もお目にかかって、親しく話もしているのですが、それでも僕にとって河合隼雄さんはあくまで「河合先生」であり、最後までそのスタンスは崩れませんでした。言い換えれば僕らは基本的に「小説家」と「心理療法家」というそれぞれのコスチュームを脱ぐことはなかった――そういうことになると思います。でもそれは他人行儀というのではなく、むしろそういう方が、そういう枠みたいなものがあった方が、お互い率直に、腹を割って話しやすかったからじゃないかと思うんです。そこにはまたプロフェッショナルとしての自然な緊張感みたいなものもありました。緊張感といっても、それは何かしらすがすがしい、実のある緊張感でした。

ですからここでも、そのような心地よい緊張感を維持しながら、河合隼雄さんのことを「河合先生」と呼ばせていただきます。うちに帰って、社会的役柄なんてさっさと脱ぎ捨てて、ただのそのへんの一人のおっさんになられた河合さんの姿にも興味はありますが、まあそれはそれとして。

僕が河合先生に初めて会ったのは一九九四年、今から二十年ほど前のことです。そのとき河合先生はプリンストン大学に客員研究員として所属しておられました。僕はその前の学期までプリンストン大学におりまして、ちょうど入れ違いに河合先生が来られたわけです。僕はその時点ではボストン近郊にあるタフツ大学に移って、そこで日本文学のクラスをもっていました。

プリンストンには二年半滞在しており、親しい知り合いや友人もけっこうできていたので、そういう人たちに会うために、ときどき車を運転してプリンストンを訪れることがあり、そこで河合先生にお目にかかる機会を得ました。ただ申し訳ないのですが、僕はその時点では河合先生がどういう方なのか、よく存じ上げなかったんです。僕はそれまで心理療法とか精神分析とか、そういうことにほとんど興味がなく、河合先生の著書も一冊も読んでいませんでした。うちの家内は河合先生のファンで、先生の書かれた本を熱心に読んでいたみたいですが、うちの夫婦の本棚というのはくっきり二つに分かれていて、内容もぜんぜん違いますし、昔の東西ベルリンみたいにまったく行き来がありません。ですから彼女が河合先生の本をそんなに読んでいるなんて、そのときまでまったく知りませんでした。

でも彼女が「あえて本を読む必要はないけど、もし会えるのならこの人とは会っておいた方がいい。きっと良い結果が生まれるから」と力説するので、僕も「それなら」ということでお目にかかることになりました。

彼女が僕に「あえて本を読む必要はないけど」と言ったのはたぶん、小説家というのは分析的な種類の本はなるだけ読まない方がいいんじゃないかと考えたからだと思います。僕もその意見には基本的には賛成です。そんなわけで、ここだけの話ですが、僕はいまだに河合先生の本をほとんど読んでいません。僕が読んだのは、先生の書かれたユングの評伝と、岩波新書から出ている『未来への記憶』という短い自伝的な語り下ろしの作品だけです。ちなみにカー

◉『村上春樹　公開インタビューin京都―魂を観る、魂を書く―』（主催・河合隼雄財団）は、2013年5月6日午後3時から京都大学百周年記念ホールで開催された。「公開インタビュー」は文芸評論家湯川豊氏を聞き手に約2時間、「スピーチ」は講演会の冒頭約25分間行われた。多くの聴衆を前にした村上春樹氏の講演会は、1995年に神戸と芦屋で開かれた朗読会以来18年ぶりとなる。

※新潮社「考える人」2013年夏号より転載　©Haruki Murakami 2013.All rights reserved.無断転載を禁止します

ル・ユングの著作も、まだ一冊もきちんと読んだことはありません。

僕は思うんですが、小説家の役目はテキストを――できるだけ優れたテキストを――パブリックに提供することにあります。テキストはひとつの「総体」、ひとかたまりとして機能するもの、いわばブラックボックスです。読者にはそれを受け取って、自分の好きなように捌き、咀嚼する権利があります。それがもし読者の手に渡る前に、著者によって捌かれ、咀嚼されてしまったら、テキストとしての意味が大きく損なわれてしまいます。だからたぶん僕はユングからも、河合先生の著作からも、意識して距離を置いてきたのだと思います。ある意味では感覚的に「近すぎる」と感ずるところがあるからこそ、いわば「敬して遠ざけ」てきたのかもしれません。小説家にとって、自分で自分を分析し始めるくらい不都合なことはありませんから。

*

とにかくプリンストン大学で、僕は初めて河合先生にお目にかかりました。まず二人だけで三十分ほど話したのですが、初対面の印象は「ずいぶん無口で暗い感じの人だな」というものでした。いちばんびっくりしたのはその目でした。目が据わっているというか、なんとなくどろんとしているんです。奥が見えない。これは、言い方はちょっと悪いかもしれませんが、尋常の人の目じゃないと僕は感じました。何かしら重い、含みのある目です。

僕は小説家ですので、人を観察するのが仕事です。細かく観察し、とりあえず簡単にプロセスはしますが、判断はしません。判断は本当にそれが必要になるときまで保留しておきます。ですからこのときも僕は、河合先生がどういう人かというような判断はしませんでした。その不思議な目のあり方を、ひとつの情報として記憶に留めただけです。

そしてこのとき、河合先生は自分からはほとんど発言をされませんでした。ただ僕の話をじっと聞き、相づちをうち、そうしながら目の奥で何かを考えておられるようだった。僕ももともと熱心に話をする方ではないので、その時間は会話よりは総じて沈黙の方が多くを占めていたような気がするんですが、先生はそういうこともあまり気にされていない様子でした。とにかく一風変わった出会いでした。とくに僕がよく記憶しているのは、その不思議な眼光です。これは今でもちょっと忘れられません。

でもその翌日、二度目にお目にかかったとき、河合先生は打って変わったように快活で上機嫌で、ひっきりなしに冗談を口にされていました。顔つきもがらりと明るくなり、その目にはまるで子供の目のように澄んだ奥行きがありました。話もはずみました。一晩でこれくらい人は変われるものなのか、とあきれるくらいです。それで僕にも「ああ、昨日はこの人はきっと意識的に、自分を受動体勢に置いていたんだな」とわかったわけです。おそらく自分を殺してというか、自分を無に近づけ、相手の「ありよう」をテキストとして、あるがままに吸い込もうとしておられたのでしょう。

それがわかったのは、僕自身ときどき同じようなことをするからです。とくにインタビューをしているときには、集中して相手の言葉に耳を傾け、自分の意識の流れみたいなものを消してしまいます。そういう切り替えがうまくできないと、真剣に人の話を聞くことはできないんです。僕はその何年かあと『アンダーグラウンド』という地下鉄サリン事件を扱った本を書くにあたって、そういうインタビューの作業を一年間とおして続けましたが、そのとき「ああ、これは河合先生があのときやっていたのと同じことな

糸くずのように身体に
べったり絡みついてくる「闇の気配」を
振り払うためには、
できるだけしょうもない、
ナンセンスな駄洒落を
口にしないわけにはいかなかった。

※新潮社「考える人」2013年夏号より転載　©Haruki Murakami 2013.All rights reserved.無断転載を禁止します

んだな」とあらためて思いました。そういう意味では、河合先生のお仕事と僕らがやっている仕事とは、重なる部分が少しあるのかもしれません。

それ以来ときどき河合先生から連絡があり、「どうですか、メシでも食いませんか」みたいな誘いを受けて、あちこちで親しくお話をさせていただきました。いつも和気藹々とした愉快な会話で、もちろんずいぶん教えられるところもあったんですが、どんなことを話したのか、内容はよく覚えていません。記録しておけばよかったんですが、お酒を飲みながら気持ちよく話しているんで、話すそばから忘れてしまいます。しょうがないです。僕が今でもよく覚えているのは、先生がいつも口にされるしょうもない駄洒落ばっかりで。たとえばこんなものです。

「僕が小渕総理が主宰する会議の座長をしている時、ある日、なんか用事があったんでしょうな、小渕さんがちょっと遅れてきはったんです。それでほかの委員がみんな揃って部屋で待っているところに、遅れてすみません、すみません言うて、丁寧に謝りながら入ってきはりました。けど、総理大臣いうのは偉いもんですなあ。僕は感心したんですが、英語で謝りながら入ってきはるんですわ。アイム・ソーリ、アイム・ソーリいうて」（場内爆笑）

河合先生の駄洒落というのは、言ってはなんですが、このように実にくだらないのが特徴でした（笑）。いわゆる「悪い意味でのおやじギャグ」です。こうして僕が引用して話すとみなさんお笑いになりますが、一対一で面と向かってこんなこと急に言われたら、なかなか笑うに笑えません（笑）。

しかし僕は思うんですが、それはそもそもできるだけくだらないものでなくてはならなかったんです。そうでなくては意味がなかった。駄洒落を言うことは河合先生にとっては、いわば「悪魔祓い」のようなものだったのではないかと僕は考えています。河合先生は臨床家としてクライアントと向かい合うことで、多くの場合、魂の暗い奥底までその人と一緒に降りていきます。それは往々にして危険を伴う作業になります。ひょっとしたら帰りの道筋がわからなくなり、そのまま暗い場所に沈みっぱなしになってしまうかもしれません。そういう力業の作業を日々、お仕事として続けておられます。そのような場所で糸くずのように身体にべったり絡みついてくる「闇の気配」を振り払うためには、できるだけしょうもない、ナンセンスな駄洒落を口にしないわけにはいかなかった。僕は先生のゆるい駄洒落を耳にするたびに、そういう感触を持ちました。いわば「毒消し」です。あるいはいささか好意的に過ぎる解釈かもしれませんが（笑）。

ちなみに僕にとっての「悪魔祓い」は走ることです。もう三十年ほど走り続けているんですが、毎日外に出て一人で走ることで、僕は小説を書くことで絡みついてくる「闇の気配」をふるい落としている気がします。ゆるい駄洒落を連発するよりは比較的害が少ないんじゃないかと、ひそかに思っておりますが（笑）。

僕らがたびたび会って話をして、でも何を話したかほとんど覚えていないと、さきほど申し上げましたが、実を言

photograph by Sugano Kenji

2003年初夏、2人は京都で対談した。

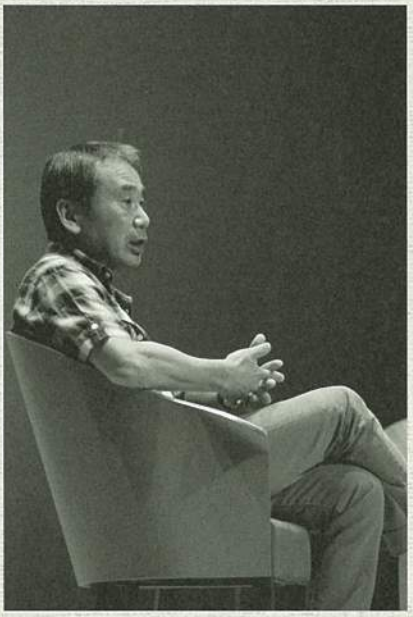
※新潮社「考える人」2013年夏号より転載　©Haruki Murakami 2013.All rights reserved.無断転載を禁止します

えば、それはそれでいいんじゃないかと僕は思っているんです。そこにあったいちばん大事なものは、何を話したかよりはむしろ、我々がそこで何かを共有していたという「物理的な実感」だったという気がするからです。

我々は何を共有していたか？　ひとことで言えば、物語というコンセプトだったと思います。物語というのはつまり人の魂の奥底にあるものです。人の魂の奥底にあるべきものです。魂のいちばん深いところにあるからこそ、それは人と人とを根元でつなぎ合わせることができるんです。僕は小説を書くために、日常的にその深い場所に降りていきます。河合先生は臨床家としてクライアントと向き合うことによって、やはり日常的にそこに降りていきます。河合先生と僕とはたぶんそのことを「臨床的に」理解し合っていた――そういう気がします。言葉にはあえて出さないけれど、犬と犬とが匂いでわかりあうみたいに。もちろんこれは僕だけの勝手な思い込みかもしれません。しかしそれに近い何かしらの共感があったはずだと、僕は今も感じています。

僕がそのような深い共感を抱くことができた相手は、それまで河合先生以外には一人もいなかったし、実を言えば今でも一人もいません。「物語」という言葉は近年よく口にされるようになりました。しかし僕が「物語」という言葉を使うとき、僕がそこで意味することを、本当に言わんとするところを、そのまま正確なかたちで、総体として受け止めてくれた人は、河合先生以外にはいなかった。そういう気がします。そして大事なことは、僕の投げたボールが相手にしっかり両手で受け止められている、隈無く理解されているという感触がこちらにありありとフィードバックされてきたことです。そういう手応えは、僕にとって何より嬉しいことであり、励ましになることでした。自分のやっていることは決して間違っていないんだと、肌で実感できたわけです。

こんなことを言うといささか問題がありそうですが、僕はこれまでのところ、それに匹敵する確かな励ましの手応えみたいなものを、文学の領域において、文芸の世界において得たことは一度もありません。それは僕にとってはいささか残念なことであり、不思議なことでもあり、もちろん悲しいことでもあります。まあそのぶん、河合先生が専門分野みたいなものを超えて、優れて大柄な方であったということになるわけですが。


photograph by Sugano Kenji

最後になりますが、河合先生のご冥福をお祈りしたいと思います。そしてこの河合隼雄賞が長く続く、意味のある賞になることを祈っています。先生には本当にもう少しでも、一日でも長く生きていていただきたかったんですが。

大事なことは、僕の投げたボールが
相手にしっかり両手で
受け止められている、
隈無く理解されているという
感触がこちらにありありと
フィードバックされてきたことです。